

第27回母子保健奨励賞 受賞者の業績



後藤 薫 (51歳) 医師・秋田県

昭和54年、秋田大学医学部産婦人科教室に入局し周産期医療に携わる。秋田大学方式の切迫早産管理法を確率するなど周産期医療の発展に尽くすとともに、後進の医師や看護師の教育に力を尽くした。平成11年には、10代の妊娠中絶の増加や性感染症が蔓延する現状に危機感を覚えて高校生に対する性教育活動を開始し、県内に広めた。少子化対策プロジェクトでも重要な役割を果たすなど県内の母子保健向上に多大な功績があった。



武田 孝子 (53歳) 保健師・山形県

昭和49年天童市に奉職。昭和56年、保健センター開設を機に、専門医の協力を得て乳児健診に眼科検診を取り入れて眼科異常の早期発見に尽力した。妊産婦相談の整備と医療機関との連携、産後うつ病質問票を取り入れた全戸新生児訪問の実施、乳幼児健診・両親教室の土曜日開催など母子保健活動の充実に尽くした。最近では妊娠中からのハイリスクマザー支援、多胎児の育児教室開催など時代のニーズに即した活動に取り組む。



工藤 祝子 (54歳) 助産師・栃木県

昭和49年、自治医大病院開設時に助産師として勤務。院内助産師としてローリスク外来や母乳外来を開設するなど院内子育て支援体制の充実に尽力した。県内の10代の妊娠中絶急増を危惧し、思春期健康教育出前講座を開始。地域の学校に向いて、臨床経験に基づく「命の大切さ」を伝える。育児相談や母乳相談に積極的に取り組み、県内の母子保健向上に大きな役割を果たした。



宮下 芳子 (53歳) 歯科衛生士・群馬県

昭和46年より歯科衛生士として子どものむし歯予防に取り組む。平成4年、富岡甘楽地区のフッ化物導入に尽力し、むし歯予防対策推進に中心的役割を果たす。「各ライフステージにおける歯科保健対策」作成に寄与し、積極的に広めた。保健所歯科衛生士の増員を推進し、母子を対象に巡回歯科保健指導を実施し、また地域住民へのフッ化物利用の啓発活動に従事するなど、地域の公衆衛生活動に積極的に取り組み、功績があった。



澤 晶子 (49歳) 医師・千葉県

大学病院勤務を経て平成元年より医師として安房地域の保健所活動に従事。講演を通じて喘息やアトピー性皮膚炎、低身長児など最新情報の伝達と知識の啓発に努め、専門医の紹介も行った。予防接種の個別化に積極的に取り組み、大きな成果があった。小児救急医療における地域の体制整備、学校保健との連携による家族ぐるみの生活習慣病予防、障害児支援などに尽力し、地域の母子保健環境向上に多大な功績があった。

田中 陽子 (52歳) 保健師・愛知県



昭和54年、保健師未設置だった豊山町に奉職。「すべての母子の健全育成とその支援」を目標に乳児訪問を開始。同57年、母子保健推進員制度を創設して訪問活動による育児支援の充実に努め、母子の健康状態の早期把握、健診受診率の向上、虐待予防に大きな成果を上げた。9か月児健診を実施して乳幼児健診の一層の充実に図り、また平成2年からは1歳6か月児健診に視力・聴力検査を導入して早期発見・早期療育に功績があった。

松岡 典子 (48歳) 助産師・三重県



病院勤務後、看護学校講師を経て、平成12年「母と子の笑顔のために」との思いで子育てなんでも電話相談室を始めた。多いときは月150本を越える相談に年中無休で対応。同13年には保健・福祉・医療の専門家とNPO法人を設立。「したい支援ではなく、してほしい支援」を合言葉に育児支援活動に取り組む。小・中・高校に出向いて「いのちを守る性の健康講座」を実施し、虐待防止に尽力するなど地域の母子保健推進に力を尽くした。

瓦井 義広 (46歳) 理学療法士・大阪府



平成3年より大阪府立母子保健総合医療センターに勤務し、障害を持つ子どもの理学療法に従事する。他施設では対応できない重症児や手術後の機能回復に取り組む。医師や看護師と連携し、新生児集中治療室（NICU）に入院中の超低出生体重児への超早期からの理学療法を全国に先駆けて開始する際に中心的役割を果たした。障害児を持つ両家・家族のサポートにも力を尽くし、小児を対象とする理学療法の発展に大きく寄与した。

濱村 陽子 (53歳) 保健師・島根県

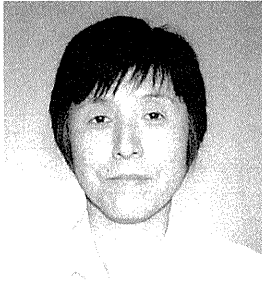


昭和52年、出雲市に奉職。乳幼児健診の充実に図り、疾病の早期発見や健康増進に努めた。社会状況の変化による子育て環境の激変に着目し、子育てサークルの育成や支援、育児不安を抱える親への支援に努め、地域の特性に応じた育児支援体制の整備に尽力した。平成14年には市民と行政の協働による「すこやか親子・いずもプラン21」の作成に参加。思春期の子どもの教育および支援体制の整備にも積極的に取り組んだ。

玉井 道子 (54歳) 助産師・岡山県



昭和47年より三菱水島病院で助産師として勤務。ハイリスク分娩の多さに妊産婦指導の必要性を痛感し、産婦人科外来に個人相談コーナーを設置。母親学級の開催、電話相談、訪問指導に積極的に取り組む。孤立しがちな母親を支援するため、妊産婦、育児中の母親が交流し楽しめる場所を提供し、また、平成9年には市内助産師のネットワークを立ち上げて医療機関の情報提供に努めるなど、地域の母子保健向上に大きく貢献した。



服部 孝子 (52歳) 保健師・山口県

昭和50年、阿武町に奉職。母子保健センターで安産教室、妊婦健診を実施し、妊娠全期の定期健診の公費負担化を図るなど母子保健向上に大きく寄与した。子どもの健全育成に親への支援は欠かせないと、母子保健センターや保育所を利用した子育て支援の拠点づくりに取り組んだ。学校と地域保健の連携にも積極的に取り組み、小中学校に出向いて命の大切さを教えるなど、幅広い活動で地域の母子保健環境整備に力を尽くした。



森本 雅子 (47歳) 助産師・高知県

昭和56年、助産師として活動を始め、平成元年より高知大学医学部付属病院に勤務。特定機能病院のスタッフとして周産期死亡減少に貢献する。核家族の育児を妊娠中から退院後まで継続的に支えるため、継続看護連絡表を作成・送付して地域の保健師との連携強化に努めた。看護協会活動などを通じて虐待予防、育児相談、思春期・更年期相談にも積極的に取り組み、女性の一生を支える母子保健の体制づくりに大きな功績があった。



稲田 明子 (50歳) 保健師・熊本県

昭和53年、玉名市に奉職。母乳育児の推進、健診の充実に尽力し、母の不安の大きい第一子家庭訪問の推進に積極的に取り組んだ。平成元年、保健センター設置に際して保健活動の充実に図り、産婦人科病院や助産師ら関係機関との連携によるハイリスク妊産婦の支援の充実に努めた。産後うつ等の早期発見、医療機関との連携による早期対応と継続支援、子育てサークルの育成支援など地域の総合的な育児環境向上に大きく寄与した。



浜野 清子 (51歳) 保健師・大分県

病院助産師を経て、昭和58年、鶴見町に奉職。長く保健師不在で保健医療事情の悪い離島を抱える地域で母子保健活動を開始。新生児全戸訪問を行い、町の中心部で実施していた健診・相談活動を僻地や離島に出かけて行うなど母子保健環境の整備に尽力した。栄養研究グループ、母子保健推進員活動など地域組織活動に取り組み、平成9年、地域の人とともにエンゼルプランを策定。虐待防止、育児不安の解消にも積極的に取り組んだ。



尾崎 アヤノ (53歳) 助産師・宮崎県

昭和56年より産婦人科診療所で助産師業務に従事。24時間体制で分娩介助を行い、乳房マッサージによる母乳育児推進と産婦のメンタルケアに取り組んだ。退院の際は産後の過ごし方や子どもとの関わり方など個別指導を行い、退院後は24時間電話相談体制を整えて育児支援強化に努めた。また若年者の人工妊娠中絶・性感染症の増加などに対応するべく学校保健・地域保健と連携して思春期相談を行うなど母子保健向上に功績があった。